

Ping Cars vol.11 : 國府理の未来のクルマ

神保 匠吾 (Ping Mag エディター)

※本稿は2014年にWebマガジン「PingMag」にて公開された記事を再掲したものです。2015年4月には、『INTERSECTION』誌フランス版に掲載されました。受付に見本誌がございますので、是非ご覧下さい。

生前、PingMagのインタビューに「クルマは未来を想像させる最も適したモチーフ」と教えてくれた現代美術家、國府理さん。その言葉に感銘を受けた私は、これまでのPingCARSの集大成ともいえるロードトリップを計画。旅の目的地は、秋田県大湯村で開催されるエコレースへ國府さんの作品で一緒に参加するというものでした。けれども、ロードトリップ記事前編となる本記事公開の前日、國府理さんは不幸の事故で、この世を先立たれてしまいました。PingMagはじまって以来、これほど悲しい出来事は経験したことがありません。

でも、そろそろ悲しみに暮れるのはやめします。なぜなら國府さんが残してくれた未来のクルマの軌跡を紹介せずして、PingMagは前に進めないのです。國府さんのアート作品は、PingCARSの中で伝えようとしているインスピレーションそのもの。例えば、トップ画像の作品、フォトショップで合成した写真にみえるかもしれないけれど、本当にヨットのセイルをクルマにくっつけて、作ってしまう人なのです。しかも、どの作品も見かけ倒しではなく、動いたり、止ったり、ちゃんと機能します！



2014年3月に都内のインタビューの様子。photo: Yuya Shimahara

本記事では追悼の意を込めて、京都市立芸術大学在学時からこれまでの作品をジャンル別にアーカイブさせていただきました。題して「國府理の乗り物ショールーム」。自転車や軽トラック、中には車輪の付いたお家まで、ぜひとも動画で動いている様子をご覧ください！

KOKUFUMOBIL

1950年代のドイツのマイクロカー、FULDAMOBILの名前を引用した「KOKUFUMOBIL」は、國府さんが作った架空の乗り物メーカー。自転車なのにペダルが見当たらない「プロペラ自転車」は、小型エンジンによるプロペラの風力で前に進む。1トンの鉛の塊に車輪をついた「1t台車」は、進行くクルマの重さを1点に濃縮したかのような印象を与える。ジョイスティックの操縦が近未来的な「Twin Wheeler GT」は、展示と同時に販売もされていたという幻の1台。



(1)「プロペラ自転車」1994年 photo: 北村光隆 (2)「1t台車」1999年 photo: 流村理 (3)「Twin Wheeler GT」2007年 photo: 國府理



PingMagと共にエコレースに参加予定だった「電動三輪自転車」や、モーターをヘルメットに内蔵した「Power Assist Helmet」(2000年)

軽自動車

スーパーカーや高性能なクルマとは無縁なはずの軽自動車なのに、メカニズムを感じてしまうのはなぜだろう。非力なクルマで急な坂道に入ったら思わずハンドルをぎゅっと握ってしまうことはないだろうか？ そんな感覚を可視化した「Mental Powered Vehicle」は、ステアリングの中に楽器の**テルミン**を内蔵して音と一緒に屋根に備え付けられたプロペラが回転！ おまけにその風で前進することもできる。前述のトップ画像の「Natural Powered Vehicle」は、日本でエコカーが取り沙汰され始めた頃、偶然にも國府さんはヨットのセイルの仕組みに夢中だった。そこで、もし風力で走るクルマがあったら究極のエコカーでは！？と閃いたのだ。見たい目のインパクトもさることながら、この作品より映像として記録することを意識するようになったという。



(1)「Mental Powered Vehicle」2006年 photo: 豊永政史 (2)「Natural Powered Vehicle」2004年 photo: 豊永政史



自動車を丸ごと冷蔵庫にした「自動車冷蔵庫」は、**コールドスリッパ**を彷彿とさせる作品。実際にクルマに乗車することができ、未来へのタイムトラベルを感じながら同乗者とコミュニケーションを楽しむことができるのだ。



(3)「自動車冷蔵庫」1998年 photo: 豊永政史 (4)「自動車水槽」1996年 photo: 流村理

軽トラック

國府さんがよく愛した軽トラックは、農業や建築現場のみならず日本のあらゆるシーンで活躍している緑の下の力持ち的なクルマ。「CO2 CUBE」では、軽トラックの排ガスをバルーン状に入れて排出量を計測。小型排気量ながら、排出ガスを発生させていることを露に。一方、荷台部分に設けられたペダルを漕ぐ力によって走る「人力自動車」は、軽トラックとはいえ、人の力では、ほんのわずかなスピードでしか進めないことを体感できる。延々と円を描いて走り続ける「響みの輪」では、前述の人力自動車に近いスピードで、跨折、ヘッドライトに備え付けられたプロジェクターから過去の映像が投影されるといって哀愁漂う作品。



(1)「CO2 Cube」2004年 photo: 豊永政史 (2)「人力自動車」1997年 photo: 國府理 (3)(4)「響みの輪」2012年 photo: 表野直



エンジン系

乗り物には、いろんなメカニクス要素が詰まっている。中でも最もその要素が濃縮された存在はエンジンだろう。「地中時間」は、エンジンを地中に埋め14年後に掘り出すというエンジンによるタイムカプセル。14年の歳月の中でエンジンに起きたことといえば、環境意識の高まりによって昔よりも肩身が狭くなったことかもしれない。空気でエンジンを冷やす空冷エンジンは、飛行機によく使われる。そんな特性を活かした「ROBO Whale」は、空飛ぶクジラをイメージした作品。完全防水加工を施したエンジンを水槽の中で個展会期中、稼働し続けた「水中エンジン」は、最初のうちは問題なく稼働したというが、個展最終日に水槽の中はオイルが溢れ出し、水槽内がドロドロになったのだとか……。絶対安全を謳った原子力発電所のメカニズムに一石を投じた作品だ。



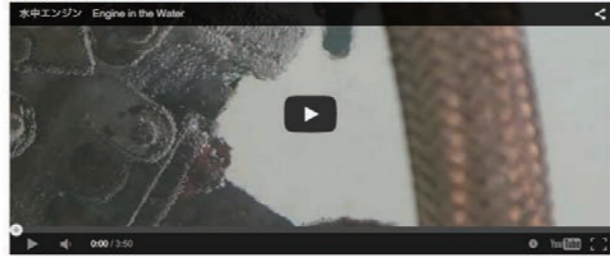
(1)「水中エンジン」2012年 photo: シュヴァーブ・トム (2)「ROBO Whale」2008-2009年 photo: 大場英和 (3)(4)(5)「地中時間」1993-2007年 photo: 國府理

エンジン系

乗り物には、いろんなメカニクス要素が詰まっている。中でも最もその要素が濃縮された存在はエンジンだろう。「地中時間」は、エンジンを地中に埋め14年後に掘り出すというエンジンによるタイムカプセル。14年の歳月の中でエンジンに起きたことといえば、環境意識の高まりによって昔よりも肩身が狭くなったことかもしれない。空気でエンジンを冷やす空冷エンジンは、飛行機によく使われる。そんな特性を活かした「ROBO Whale」は、空飛ぶクジラをイメージした作品。完全防水加工を施したエンジンを水槽の中で個展会期中、稼働し続けた「水中エンジン」は、最初のうちは問題なく稼働したというが、個展最終日に水槽の中はオイルが溢れ出し、水槽内がドロドロになったのだとか……。絶対安全を謳った原子力発電所のメカニズムに一石を投じた作品だ。



(1)「水中エンジン」2012年 photo: シュヴァーブ・トム (2)「ROBO Whale」2008-2009年 photo: 大場英和 (3)(4)(5)「地中時間」1993-2007年 photo: 國府理



普通自動車

普通自動車なのにフツーに前に進むことはおろか、1台もタイヤが地面に接していない……。ロケットみたいに今にも空高く飛び立ちそうな「Launch」は、同時多発テロといった当時の社会への不安感を表現した作品。ひっくり返ったクルマが立体駐車場の裏側にぶら下がっている「Upside Down Terrace」は、まるでテロリストが、何かを企んでいるみたい。一方、クルマがひっくり返っているのは同じだけれど「虹の高地」は少し異なる。砂漠のオアシスのように、無機質な鉄の塊の上を有機的な植物が茂っている。移動する乗り物から生態系をもった新たな装置へと進化している。



(1)「Launch」2001年 (2)「Upside Down Terrace」2010年 photo: 大場英和 (3)「虹の高地」2008年 photo: シュヴァーブ・トム

家

家や土地は不動産と呼ばれるように動かないものかと思っていたけれど、動くのですか……。パラボランテナの上に音がおしげった「Parabolic Garden」は自走する庭園。お庭が自ら目的地を探して動き出すのだ。アクリルで覆われた温室がキャタビラーの上に乗った「未来のいえ」は、屋内の自然環境を保ちながら悪路を走破できる。もしも本当に人工的なジオラマ環境の中で、生態系が生息し続けることが出来たら、その時こそ未来の家のかもしれないですね。



(1)「Parabolic Garden」2010年 photo: 豊永政史 (2)「未来のいえ」2013年 photo: 表野直



こうやって國府さんの作品をみると、クルマなのに！家なのに！みたいに、ありえない組み合わせに思わずハッとさせられます。それでいて、どこか見覚えのある要素同士が上手に組み合わせることで、もしかして本当に実在する乗り物なのでは？と次第に思えてしまいます。しかも、ほとんどの作品には乗車することができる！それこそ、國府さんの作品の最大のメカニクスといえます。

子供の頃からメカ好きで、美大へ入学するも在学中は、自身のバイクやクルマを改造することに明け暮れていたという國府さん。在学中に出会ったソーラーカー制作のプロジェクトに属するうちに、いつしかメカへの好奇心をダイレクトに作品へ投影してよいことに気づいたと言います。それと同じように、未来とは必ずしもSF映画でみえるような世界というわけではないのかもしれない。國府理の未来のクルマを通して、ほんの少し物事を俯瞰的にみることができたなら、全く新しい発見や価値がみえてくるように思えるのです。PingCARSでは、そんな閃きを今後もドシドシお届けできたらと思っています。では、次回もお楽しみに！

トップ画像: 「Natural Powered Vehicle」2004年 photo: 豊永政史

Special thanks: 藤田千彰